

2024 年度 同志社女子大学入学式  
同志社女子大学大学院入学式  
同志社女子大学音楽専攻科入学式

式辞

学長 小崎 眞

冬の寒さに耐え忍んだ桜が、春の日差しを受け、美しく咲く時を迎えています。本日、ここに2024年度同志社女子大学入学式、同志社女子大学大学院入学式、並びに音楽専攻科入学式の時を与えられ心から感謝いたします。

あのコロナ禍にあって、大切な学校生活を奪われ、様々なご計画を断念せざるを得ない状況に對峙しつつも、互いに研鑽を重ね、堅実な歩みを築き本日のご入学へと至られた新入学生、新入院生、新入専攻科生の皆さんに、心から敬意を表すとともに、直接お祝いの言葉を伝えることができ、大変嬉しく思います。また、ご臨席頂いておりますご家族の皆さま、あるいはオンラインにて、つながる皆様にも心よりお祝いを申し上げます。本学へのご入学、誠におめでとうございます。

さて、明治期の日本社会にあって、創立者新島襄が、女性に対して求めた「社会の不義や不正を憤って嘆くこと」を意図する「慷慨心」の涵養という視座は、ジェンダーギャップ指数の低い日本社会をはじめ、多様化する21世紀国際社会においても極めて重要な姿勢であります。換言すれば、共学教育の中で無批判に共有されてきた男性基準に縛られることなく、多種多様な女性の可能性への模索は、女性教育の中でこそ、実践し得ることなのかもしれません。「高い山を作るためには、土台を広く深く」と指摘されるように、貴重な学生生活の中で、専門的学びと合わせ「人としての土台づくり」は大変重要であるといえます。「コスパ」や「タイパ」との言葉が示唆する自分自身の「計算や思い」から解き放たれる事が大切なのかもしれません。

ある書籍の中で興味深い指摘に出会いました。ヒンディー語で、「私はうれしい」というのは「私にうれしさがやってきて留まっている」と表現するようです。また、「私はあなたを愛している」というのは「あなたへの愛が私にやってきて留まっている」と表すようです。私が合理的に解析してあなたを好きになったのではなく、思いもよらない「愛」というものが私にやってきて、私を揺り動かすとのことです。大学という「学びの世界」にも、想定外の疑問が私に訪れ、私を揺り動かす場面が多々あるかと思えます。真実なるものに問われ、私自身に変容が生じる場でもあります。

新島も自身の手の内にはない100年、200年先を見つめて同志社の教育を語りました。新島の視座に連なり、私たちも、せめて10年、20年、いや50年先を見据えた研究・教育活動の実践が必須であると考えています。数年程度で陳腐化する最先端の事柄に右往左往するのではなく、真に新しく重要な価値観（オルタナティブの価値観）を構築する「根っこの力」の涵養こそが最も大切であります。

皆さんお一人おひとりにとって、本学がご自身の「根っこの力」を醸成する場、他者との真の出会いを通し自己変革へと促される場であることを願って止みません。その姿勢は結果的に女性の進出を阻んできた社会を改良する一助となることと思います。

本日より始まる皆さんのかけがえの無い歩みを、ご自身の目的のみに縛られた世界へ閉じ込めるのではなく、「同志社女子大学の学びが私の所にやってきて留まっている」、「真実探求の面白さが私に訪れ、留まり、無性に揺り動かされる」そのような学生生活へと導かれることを願っています。

私たち同志社女子大学の教職員スタッフ一同、全力で皆さんの教育・研究活動を応援して参ります。本日は誠におめでとうございます。そして、何卒、よろしくお願い致します。

#### 参考資料

池上 彰 (2018) 『知の越境法「質問力」を磨く』 光文社

中島岳志 (2021) 「利他はどこからやってくるのか」, 伊藤亜紗編 『「利他」とは何か』 (集英社新書) p. 67-107, 集英社

森本あんり (2024) 「お砂場の真実—現代日本にこそ女子大学が必要である」 『IDE 現代の高等教育』 No. 658・2-3月号, P. 10-13.